歴史を紀行する

司馬遼太

# 歴史を紀行する

司馬遼太郎

文藝春秋刊

歴史を紀行する

定価　四八〇円

昭和四十四年二月一日　第一刷

著者　司馬遼太郎©

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話（代）二六五―一二一一番
郵便番号　一〇二

印刷所　凸版印刷
製本所　中島製本

＊落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

# 目

# 次

竜馬と酒と黒潮と　〈高知〉　7
会津人の維新の傷あと　〈会津若松〉　29
近江商人を創った血の秘密　〈滋賀〉　51
体制の中の反骨精神　〈佐賀〉　71
加賀百万石の長いねむり　〈金沢〉　91
〝好いても惚れぬ〟権力の貸座敷　〈京都〉　111

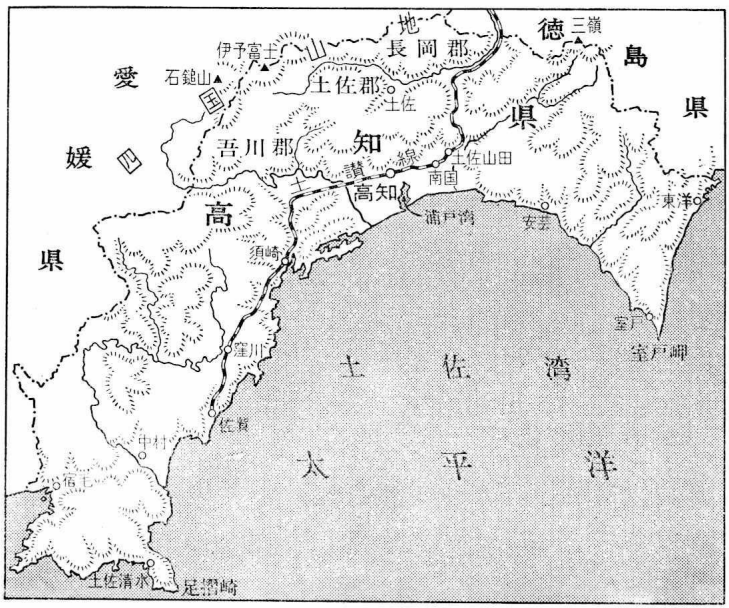
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

独立王国薩摩の外交感覚〈鹿児島〉 131
桃太郎の末裔たちの国〈岡山〉 149
郷土閥を作らぬ南部気質〈盛岡〉 169
忘れられた徳川家のふるさと〈三河〉 191
維新の起爆力・長州の遺恨〈萩〉 211
政権を亡ぼす宿命の都〈大阪〉 231
あとがき 252

# 歴史を紀行する

# 竜馬と酒と黒潮と

〈高　知〉




此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

## 風体野盗に異ならず

ずいぶん土佐と土佐人のことを書いてきたが、われながら妙である。なぜこれほどの関心を持ったのか、この稿を書くにあたって考えてみたが、わからない。

多くの場合、理由をことさらに考え出すということは、物事を鮮明にすることではなく、理由のぶんだけ物事を複雑にするか、その理由のぶんだけうそになりがちなようである。

豊臣時代、大坂城下の町民たちがはじめて土佐武士というものをみた。土佐の長曾我部氏が秀吉に降伏し、大坂へのぼってきたのである。首長の長曾我部元親は屈強の家臣五十人をひきつれ、海路大坂に入った。沿道に見物がひしめいたが、みな、はなしにきく土佐人というものの風体におどろいた。

——その風体、野盗に異ならず。

という。遠い海のそとから蕃族かなんぞがやってきたような異様さをひとびとは感じたであろう。着物はみじか袖で、背中に綿をたっぷり入れ、帯はといえば西畑という木綿のものを胴でぐるぐる巻きにし、一見土竜のごとし、という印象であった。月代はほとんど坊主同然に大きく剃りあげ、帯び

ている刀は三尺もある長刀ぞろいで、差し添えている脇差ときたら、普通ならば短刀に毛のはえた程度の長さでいいのに、大刀ほどにながい。大刀が折れたときにすかさずこれを抜いて役立たせようとするのであろう。

騎っている馬もまた異様であった。犬かとおもわれるほどにちいさかった。土佐駒とよばれるものであり、当時の日本でも最も矮さな種類の馬で、騎馬戦をすれば馬格の大きなものにくらべて不利にちがいなかったが、しかし山路の騎走には大いに適し、荷駄馬としても屈強であった。長曾我部勢はこの馬をもって四国全土を席捲し、斬り従え、やがて秀吉政権に降った。秀吉は元親に対する引出物として多くの物品をあたえたが、そのなかに鞍置きの葦毛の馬一頭があった。

元親は帰国し、それを家臣たちにみせたところ、かれらは馬の大きさに肝をうばわれ、「これが馬か」と口々にさわぎ、さらにその鞍の美麗さに一驚した。鞍は梨子地のもので、当然ながら黄金色に光っている。なぜこれは光るのか、とかれらにはこの種の漆工芸が理解できなかった。それほど土佐国というのは、日本の共通文化のなかから隔絶されていた。土佐人が、大規模なかたちで日本の共通文化と接触をもつにいたったのは、この豊臣政権という、日本における厳密な意味での最初の統一政権の出現のおかげであろう。

土佐の古名を、

「建依別の国」

という。古事記に出ているから、その成立時代の中央人たちは、はるかな南海のその地方について、

剽悍でたけだけしいひとびとの棲む地帯という印象がすでにあったのであろう。この建依別という美称は後世にいたっても土佐人の好むところであり、土佐で書かれてきた郷土史の多くはかならずその冒頭にこの美称に触れている。土佐びいきの筆者も、この美称を好む。男子は剽悍であるほうがうつくしいからである。

## 黒潮が結ぶ三つの地

さらにこの美称から空想して黒潮の流れを想わざるをえない。黒潮は沖縄をへて、薩日隅三州を洗い、土佐をあらい、熊野をあらい、やがて沖へ流れ去ってゆく。薩摩、土佐、熊野という黒潮の流れる三つの地帯の日本人には共通したなにかがありはしないか。極端にいえば同一人種性が濃厚であるとおもうのは、筆者の妄想だろうか。戦前、沖縄の糸満の漁夫が、カヌーを操ってこの黒潮に乗り、潮のまにまに北上して鹿児島沖で漁をし、土佐沖で漁をし、さらに熊野沖まできて帰ってゆく。カヌー程度での舟でらくらくとそれだけの航海ができるのである。古代人もそうしたであろう。そのようにしてこの三州の沿岸に同血の種族の聚落をふやして行ったことであろう。

記紀には神武天皇があらわれてくる。記紀によれば南九州に本拠を置くこの首長が、武装集団をひきいて東征し、大阪湾に入り、摂津・河内の平野を陸行して大和へ入ろうとし、生駒山脈で大和の土豪にさえぎられて敗退する。敗退してふたたび大阪湾にうかび、紀伊半島西岸を南航し、半島南端の熊野海岸に上陸する。それがいまの白浜あたりであるか新宮であるかはわからないが、とにかく黒潮沿岸地方に上陸する。

そこにはかれら南九州勢と同縁の種族の大聚落があったからであろう。その首長が八咫烏だったのであろう。その熊野族と合流して紀伊半島を北上し、大和に入り、征服を完結する。その伝奇の真偽はともかく、それがたとえ創作であってもその創作を発想させたのは、右の三地方の親近性ということではあるまいか。

熊野や薩摩は、まあいい。

ここでは、土佐である。土佐は熊野や薩摩とくらべてもくらべものにならぬほどに自然条件がその住民を隔離していた。

生物をすら、限定させていた。たとえば日本中どの地方にでもいるはずの鯉ですら、この土佐では三百年前までは棲息していなかった。一六五五年――明暦元年――土佐藩の宰相野中兼山が大坂から一万尾買いつけ、海路はこび、国中の川や池に放ちに放ってからようやく繁殖したという。鯰もいなかった。鯉は鯰がいなければ繁殖しがたいということを上方できき、鯰も一万尾買いつけてきておなじく放ち、鯉と共棲させた。

人間については四国を南北にへだてる脊梁山脈が巨大な障壁になって他国との往来を隔絶させている。四国山脈の隔離能力というものは、日本の他のどの地方の山脈よりもはるかに大きいものであろう。汽船の出現によって浦戸湾を基点とする太平洋航路がはじめて開発されたが、明治以前の和船ではこの航路によって江戸へゆくことはおろか、大坂へゆくこともできなかった。

それまでは四国山脈の嶮路を越えていったん愛媛県に出、しかるのち香川県に入り、多度津あたりから大坂ゆきの和船に乗る。土佐国司紀貫之などは五十余日をついやしているが、幕末にいたるまで

のその交通事情はさほどにかわっていない。このような自然の事情が、土佐人の型に大きな影響をおよぼしていることはたしかであろう。

空想をゆるされるならば（大いにゆるしてほしいのだが）、この隔離性のためにかれら土佐人はその精神的骨格のなかに日本人の固有なるものを多く残し、また大きく翻っておもえば、かれらは唯一の固有日本人（あいまいな呼称だが）というべきものかもしれないのである。

土佐には和鶏の一種で「東天紅」という日本固有の鶏が天然記念物になって残っている。古代の鶏の常世長鳴鶏（とこよのながなきどり）というのはおそらくこれにちがいない。その例を人間の世間にひきあわせるのはどうかと思われるかもしれないけれども、日本人としての固有性の高い存在というものがあるとすれば、それは土佐人ではないかという気がする。

## 土佐弁こそ日本語？

満州の地に鍬をもった漢民族が移植して固有の満州民族はさがそうにもいない。わずか六十万の種族をもって中国大陸を征服し清帝国をうちたてた愛新覚羅（あいしんかくら）氏の固有満州民族（ツングース）は、いまや漢民族と混血してしまって消滅しはてている。かれらが騎馬を駆って長城を越えたのはわずか三百年前のことであり、しかもその帝国はわが徳川幕府とおなじほどの寿命をもった。

それほどの種族がいまどこにいるかわからず、その言語は死語になり、その固有なるものをしいて探そうとすれば大興安嶺の密林のなかでも探険しなければならないであろう。血液の同化というのはそれほどに容易で、それほどにすばやい。固有なるものが残るということは、それほどに至難なこと

だが、四国山脈と太平洋の障害が、土佐人の風骨（血液とまではいわない。千年、万年という長年月にわたる緩慢なる血の交流が、土佐人をも人類学的な通日本人として仕あげてしまっている。しかし風骨といえば学問の制約をうけぬ把握ができるであろう）のなかに固有なものを残さしめているような気がする。

具体的事象のなかにも、固有なものがのこっている。土佐人は、水を midu という。づを発音することができるのである。づとずを区別する。ぢとじを明瞭に発音わけする。新カナづかいになったときに最大の被害をうけたのは高知県の小学生たちであった。かれらにとってはづとずはまったく別なものであるのにそれをすべてずとして書かねばならなかった。

江戸期に土佐藩士が江戸へゆき、江戸者をはじめ他国の者がこの区別ができないことに気づき、江戸弁や上方弁よりも土佐弁のほうが日本語として正しいとおもった。方言による劣等感をもたなかったばかりか、軽い優越感すらもった。これは幕末の土佐人が藩外活動をする上で自信の根拠の一つになったであろう。国語学者土居重俊氏によれば「……土佐ことばの最も大きな特色であり、昔から土佐人のお国自慢の一つに数えられてきたことである」（『土佐言葉』）とある。坂本竜馬は生涯、どの土地のたれに会ったときでもまる出しの土佐弁で押し通したという。おかしければ本居宣長の『玉勝間』を読め、というところであろう。そこでは土佐人の発音の正確さについてほめて書かれているのである。

土佐は僻地（へきち）である。しかし僻地であるという劣等感はいまもむかしも土佐人は奇跡的なほどにもっておらず、そのことが土佐気質の特徴の重要な一つであるとおもわれるのだが、これはその方言が日本語の固有なるものに近いという、お国自慢にすらかぞえる自信が大きく作用している。かれらの発



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com